

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

〈日本語解説〉 「タヒチにおける客家と華人のはざま：マンダリンから語る」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009538

〈日本語解説〉「タヒチにおける客家と華人のはざま——マンダリンから語る」

著者の童元昭は、台湾の人類学界におけるオセアニア研究の権威の一人である。アメリカに留学していた大学院生時代よりタヒチの華人社会における調査をはじめた。タヒチの華人のマジョリティが客家であるため、彼女のタヒチ調査は実質的に客家の調査であったが、序論で述べたように1990年代まで童元昭は「客家」という概念を使うことがほとんどなく、タヒチにおける「華人」カテゴリーの生成について焦点を当ててきた。本稿は、そうした経歴をもつ氏が、タヒチにおける華人と客家の間の関係性について、特に言語的要素から議論を展開している。本稿の概要は次の通りである。

- タヒチにおける客家のマジョリティは客家である。タヒチでは広府人（本地；Punti）が少数者であり、広東語を使わないなど「隠された」集団となった。それゆえ、七邑（南海、中山、花県、増城、鶴山、四邑、番禺）の出身者が広府人、恵陽、東莞、深圳の出身者が客家と判断される。第二次世界大戦後前、華人学校ではマジョリティ言語である客家語で授業がおこなわれていた。戦後になると中国語（マンダリン）にとってかわったが、核実験後にフランス国籍への公民化が進んだ。1964年には華人学校も全て閉鎖された。1962年には中国語を話せる成人が61%であったのに対し、1996年にはごく少数しか使えなくなった。
- 客家語は家庭の言語となり、それが現在まで継承されているかは各家庭の教育に依存するようになっている。だが、通婚が進むにつれ、家庭でも客家語を話す機会が少なくなり、タヒチの華人社会では次第に客家語が失われるようになっている。客家語にかわり、客家としてのアイデンティティを示す新たな指標となっているのが、「掛山」という祖先崇拜儀礼である。1930年には広府人が「掛山」に参加していなかったが、後に参加するようになっている。実質的に、客家と広府人とは生活習俗のうえで差がなくなり、「掛山」は客家の特色であるとは言えなくなっている。ところが、「掛山」は客家というエスニシティをめぐる新たなシンボルとなっている。
- 現在、タヒチの客家の公用語はフランス語である。客家語が家庭で使われる私的な言語であるとするならば、中国語（マンダリン）は外国語として修得する対象になっている。タヒチでは華人は少数者である。だから、タヒチの客家は自身が客家であることは認識しているけれども、より「タヒチの華人」であることに重要性を見出すようになっている。だから、1990年当時、タヒチの高齢者は孫に中国語の習得を推奨していたし、2018年にはイベントでフランス語と中国語を併用している。

ここから分かるのは、タヒチでは客家がマジョリティであり、かつては客家語が学校教育でも使われてきたが、戦後は客家と客家語が私的領域に押し込められる傾向が強まったことである。戦後は公的に中国語（マンダリン）を使用し、会館の記念刊行物などでも中国語が使用されるなど、「中国人」としての立場が前面に押し出されるよ

うになった。それは—前出のモーリシャスと同じく—多様な民族が混住する地において客家と非客家が「中国人」として団結し、「タヒチの華人」としてのプレゼンスを高めることとかわっている。現在、タヒチでは中国の会話や読み書きのできる人は限られているが（中高年者の間では漢字を読めなくても客家語が話せる人が多い）、それでもイベント時には「タヒチ華人」としての自己を示す手段として中国語の漢字が使われている。他方で、私的領域としての客家語も衰退の途をたどっており、かわりに客家の新たな指標として登場したのが、家族の私的な祖先崇拜活動である「掛山」である。「掛山」が客家のエスニシティ性を示す新たな指標になっていることは、第IV部にみるジャマイカの例とも共通しており、興味深い。

(河合洋尚)